

これからの理学療法研究—世界への発信—

4 循環器理学療法研究の立場から

北里大学病院 リハビリテーション部 神谷健太郎

人口の高齢化に伴い、先進国において心血管疾患患者が増加している。世界187カ国で行われた疾病負担に関する国際共同研究によると、1990年に第4位であった虚血性心疾患は、2010年には第1位となっている(Lancet, 2012)。循環器疾患は加齢に伴い罹患率が指数関数的に上昇する疾病であり、理学療法士が遭遇するcommon diseaseの代表的疾患となっている。循環器疾患は、十分なリスク管理のもとで効果的な理学療法介入を行えば、機能予後や生命予後をも左右する成果が期待できる。しかし、日本理学療法士協会が公表している認定理学療法士数に目を向けてみると、循環器分野は他分野に大きく遅れをとっており、更なる臨床、研究、教育の発展が期待される。

循環器分野の国際学会で最も影響力のある学会は米国心臓病学会(AHA)とヨーロッパ心臓病学会(ESC)で、近年の演題採択率はAHA 45%、ESC 40%前後である。国際学術誌のトップジャーナルはJournal of the American College of Cardiology, Cir-

culatation, European Heart Journalがあげられる。これらの雑誌や5大医学雑誌に掲載された論文は、その後のガイドラインに反映され、世界の循環器臨床、研究、教育に大きな影響を与える。本分野で研究し、その成果を世界に発信していく上では、これらのコアジャーナルやガイドラインにおいて何が分かっている、何が未解決であるのかを十分調査した上で行わなければ、国際誌へのアクセプトは難しくなる。逆に、そこが明確であれば、臨床研究は特別な研究機関でなくてもコストをかけずに実施可能である。日常臨床の中で信頼性の高い評価指標を用いて介入を評価し、予後を追跡することは、臨床能力を改善させるよい機会となる。

本シンポジウムにおいては、最近の循環器領域の研究や自らの経験をふまえ、これからの理学療法研究についてお話ししたい。本分野に精力的に取り組もうとする若手研究者や臨床家の皆様の参考になれば幸いである。

卒後教育・管理の現状と展望

1 当院における新人教育プログラムの紹介と職員管理について

神戸リハビリテーション病院 リハビリテーション部 沖山 努

当院は、3つある病棟がすべて回復期リハビリテーション病棟であり、リハビリテーションの施設基準としては、脳血管疾患等リハビリテーションと運動器リハビリテーションの2つである。また、関連施設として、介護老人保健施設を2つと訪問リハビリテーション部門も有している。

理学療法士は病院に52名、2つある老健施設に5名、訪問リハビリテーション部門に5名それぞれ配置している。365日リハビリテーションと、患者1人平均6単位以上の充実リハビリテーションを実施するため、また、介護保険領域でも訪問リハビリテーションへのニーズに対応し、同時に個別加算をより多く実施するため、平成6年度より毎年5名から10名を超える新入職員を採用してきた。その結果、病院に限定した場合の職員構成は、卒後3年以内の職員が全体の38.5%を占めており、職員教育が重要な課

題となっている。

職員研修の中で最も重視するのは治療技術の習得であり、職員の多くも技術研修には積極的に参加している。一方で、機能維持のための自主練習、退院に向けた環境調整や家族に対する介助指導、あるいはデイケアや訪問リハビリテーションに繋げることなども重要な業務であるが、この部分の研修が必ずしも十分出来ているとは言い難い。また、接遇研修や安全管理、感染対策といった社会人として、あるいは医療人として知っておかなければならない基本的な研修にいたっては、業務の多忙さもあって参加者を確保するのに難渋している状況にある。

今回は、当院で行っている新人教育プログラムを紹介するとともに、臨床経験3年を超えた職員の現状と管理体制を報告し、本シンポジウムでの検討材料としたい。